

小学校との連携を視野に入れた

体験型共同学習プロジェクトの教え方 連載 1

プロジェクト型カリキュラムは西欧先進諸国において行われている教育法ですが、世界がますますグローバルゼーション化する時代に、子どもが受け身的に知識や人間関係を学ぶのではなくて、積極的に自ら探索し自ら学ぼうとする意欲を育てるプログラムです。プロジェクト幼児教育はドイツのイエナプラン、イタリアやアメリカのレッジオ・エミリア幼児教育、スウェーデンの E d u - C a r e (養護と教育)、そしてオランダの Piramide Method(ピラミッド・メソッド)等が積極的に取り入れています。

プロジェクトの大きな特色は、子どもの関心事や体験からテーマを選び、八つの発達領域との関連で1年間のプロジェクトが進められます。毎月、第1週から第4週まで、平均30分(年少)から50分(年中、年長)程度プロジェクト活動を行います。普通の日々の保育活動に、特定のカリキュラムを導入するやり方ですが、知識(教科)の基礎となる包括的な学び方から、教科(例えば、数える、大きい小さい、文字への興味、世界への知識等)に導く小学校と連携したカリキュラムです。

オランダの国立大学での検証結果、プロジェクトで学んだ子ども集団は、従来の一斉型教育で学んだ子どもに比べ、言語獲得能力の高さが証明されました。その理由として、保育者から一斉に伝達されて受け身的に学ぶのではなくて、体験と小さなグループに分かれる共同学習法に加えて、同じテーマを3年間かけて行われるらせん状的な動的発達理論が根拠になっています。

プロジェクトは、平素の保育活動の流れの中に、特定の活動(プロジェクト型カリキュラム)を取り入れる幼児教育活動です

日本の伝統的な幼児教育(保育)は、系統的に多くの知識を一斉に伝達する知識蓄積型教育法です。(アジアの経済発展が目覚ましい国々も同様な方法です。)それに対して西欧では系統的な知識や教科(読み・書き・計算)を教える前に、子どもの現実的な関心事からテーマを引き出して、子どもの生活環境全体からテーマを展開することで、子どもが自ら探索して解決法を探るプロジェクト教育が主流です。それぞれの国の文化的な違いから教育法も異なってくるのですが、明治百数十年にして西欧文化と科学を身につけた日本の奇跡の秘密は、日本的一斉型教育法だと信じられ、現在の発展途上国の経済発展のモデルになっています。しかし、日本的奇跡も各分野ではころび始め、特に教育分野における学ぶ意欲の低下や学級崩壊、小1プロブレムと難問が山積みです。

近年、プロジェクト教育が注目を浴びている理由の一つに、OECD（国際経済協力開発機構）によるPISA（生きる力と技能テスト）、通称国際学習到達度調査があります。

PISAテストは「生きる力」を試しているといわれる理由に、従来のIQテストや学力コンクールの能力競争ではなくて、子どもが身につけた知識が、現実にどれだけ応用できるかを試すものです。身につけた教育力が、生活の中でどれだけ役に立っているか、言い換えれば教育の市場性テストです。教育の市場性（役立っている指標）という言葉は、教師や教育学者から非難を受けやすく、伝統的に日本の教育界を被っている教育論は、子どもの気持ちの尊重や学ぶ意味論的な精神論が中心で、教育が現実生活で役に立っている目安論は嫌われてきました。しかし、教育というのは、現実社会で生きていくための道具（手段）であって、教育を受けるために生きているのではありません。受験一辺倒の中で、親も教師も教育で苦労してきた歴史を背負ってきたが故に、心理的反動として、教育を純粋化して論じる傾向があります。

オランダの子どもの学力（PISA）は、世界の高レベル層の成績を残していますが、その秘密はオランダの幼児教育法ピラミードにあると言われていています。1970年代頃からオランダには多数の移民家庭の子どもが保育園や幼稚園に通い始めました。オランダ語が不自由な移民家庭の子どもたちは、先生から質問されるといつも“はい、はい”とうなずくことに保育者や教師は気づき始め、クラスのお客様な子どもの増加に、理解の困難な子どもへの個別指導の必要性を実感し始めました。その結果、一斉型の保育と個別対応の保育を取り入れたプロジェクト幼児教育の研究が進みました。一言でいえば、プロジェクト型カリキュラを平素の保育活動の流れの中に、特定の時間に特定のカリキュラムを取り入れる方法です。「各プロジェクトのテーマは、約1か月続き、そしてすべての発達領域が計画に組み入れられます。例えば、スーパーマーケットを中心に構築されるテーマは、自然と数式展開へのチャンスであり、私たちが着用する服を中心に作りあげられるテーマは、言語概念を含む活動に役立ちます。祭りは時間概念を検討することを助長し、そしてお祝いは、感情的、社会的概念への扉を開きます。」とピラミードの開発者カルク博士は教科（数、言語、時間概念等）との関係も強調しています。

プロジェクト導入

保育者は平素の通常保育の流れの中で、子どもが最も興味を持っている事柄や子ども間で話される会話の内容等から、プロジェクトの主題であるテーマを引き出します。年間の発達領域(カリキュラム)は、保育者が子どもを導きたい

と思っている保育の軌跡（カリキュラム）であり、園全体としての年間カリキュラムは園の教育（保育）理念ですが、それらのカリキュラムを展開する道具としてテーマが必要です。そのために子どもが興味を持っていることから展開するためには、日ごろの子どもの遊びを観察し、子どもの会話に耳を傾け、質問をすることで、子どもの興味の情報を集め、子どもたちの先行経験（体験していること）や理解力を知っておく必要があります。

大まかなテーマが決まると発達領域との関係を明確にして、展開方法やプロジェクトを行う場所、規模、素材等の検討を行い、子どもの興味と保育者が子どもを導きたい方向のバランスの取れた Web（くもの巣）を作図します。

平素の保育活動の中でテーマに関する遊びや情報を手に入れた子どもたちが、第4週目のプロジェクトの日（Project Day）に平素の保育活動の包括的なまとめとして、お店さんごっこ、フアッションショー（劇）、アメリカ旅行等のお祭りのイベントや作品作りを行うことで、プロジェクトで学んだことを言語化、抽象化、作品化させます。保育者は、子どもたちがプロジェクトの行われる第4週目を待ち望むように気持ちを鼓舞し、保育者自身もプロジェクトの最終準備に励みます。

プロジェクト幼児教育は同年齢構成と異年齢構成（マルチエイジング）の組み合わせによって行われるプログラムです

昨今のマスコミを通じて報道される「学校内イジメ」問題は、日本の教育が抱えている根本的なウミが溢れ出たようです。「学校内イジメ」問題を教育的な視点から言えば、子どもたちの極端な単層型生活形態に問題の根っこがあります。同じ地域に生まれた子どもは揃って同じ年齢構成で、同じ内容の知識を同じやり方で教えられます。同年齢が同じ知識内容の教育を受けることは、全体的な組織力を発揮しますが、個々の子どもの違いや持ち味は無視され、異年齢間の交流や人間関係を鍛えられるチャンスを失くすと同時に、異年齢体験のない子どもの遊びが、人間関係の希薄さにも現れています。

オランダのプロジェクト幼児教育は、マルチエイジング（異年齢集団）で行われますが、一斉的な教え方と異年齢集団を個別的に教える方法が取り入れられています。特に理解が困難だったり、オランダ語を話せなかったりする子どもが多いクラスでは、一斉型と個別指導がうまく組み合わせられ「落ちこぼれへの抵抗」と呼ばれるカリキュラムが充実しています。

平素の保育活動は同年齢で行われ、子どもたちの発達年齢に適し知識や技術を身につける活動ですが、プロジェクトの日（Project Day）には、異なった年齢構成の時間を過ごすことで人間関係のスキルを磨きます。異なった年齢構成の原型は家族で、世話をする、教える、世話される、教えられる関係をプロジ

エクト活動の中で体験することで、子どもたちは複雑な人間関係を学びます。一方的に教えられる体験では学ぶことのできない、人間関係の基本を身につける貴重な時間です。現代の家庭は家族の形を失いました。多くの子どもの食卓は一人で食べる孤食であり、親子の会話は限られた短文であり、子どもたちの一日の時間はテレビ、テレビゲーム、携帯、マンガ、DVD等に費やされています。プロジェクトの日 (Project Day) では、同じテーマを年齢の異なった子ども同士で学び、体験し、意見を述べ合う時間を通して複雑な人間関係の営みを学びます。

同じテーマを三年間繰り返す

プロジェクト型カリキュラムは、近年最も注目されている動的発達心理学の短期サイクルと長期サイクル理論から成り立っています。短期サイクルとは、子どもに身近な物事からテーマを取り出して関心を引き起こさせ、次第に距離間のある事柄へと導く指導法で、子どもは目の前に起こる事象から探究心や観察力を養い、距離を取ることで抽象的な理解を身につけて言語表現力を高めます。子どもに近いところ、つまり目の前にある事柄から始めることが何より大切です。なぜなら、それが距離をとる始点になるからです。子どもの近くから始めることは子どもに安心感を与えるのです。身近なものは親しみがあって恐れや不安を引き起こさず、むしろ探索のチャンスになります。この表現力は2歳頃から発達して、単純なものから複雑なものへと進みます。初めは非常に具体的な表現が発達します。これは物や現実に近い状況の具体的な描写です。続いて、6～7歳頃从这个表現はより抽象的になります。具体的なものからより抽象的なものまで、いろいろな表現のレベルが段階的に形作られ、具体的には4週間をかけて子どもの理解を促します。身近なレベルの表現は、観察すること、列挙すること (数え上げること)、そして物の名前を言うことなど、目の前にある事柄に近い表現です。この表現レベルは「1週目：概念を与える (具体的な説明をする)」「2週目：体験させる (見本を見せる)」段階です。中間レベルの表現は、比較すること、そして共通点と相違点を見つけることのように、抽象性がより高い表現です。この表現レベルは「3週目：知覚を使う (理解を広げる)」段階で使用します。さらに「4週目：関係性を理解させる (理解を深める)」段階ではより高いレベルの表現を使用します。これは関係性を見つけることを学び、物事の一般化 (概念化) の基本を学びます。

長期サイクルとは、毎年同じ時期に同じテーマを繰り返し、前年より高いレベルで繰り返すテーマ展開により、子どもの理解を深めます。プロジェクトは3歳から5歳までの発達期間に実施します。子どもは次々と4つの段階を通し

て与えられる知識が、3年間という長期のサイクルの中に組み入れられます。

長期サイクルは出生時の‘反射’から始まって‘行動’がこれに続きます。これらはその後‘表現’になり、さらに‘抽象’になります。

出生後まもなく、赤ちゃんは‘反射’を使います。これらの‘反射’がさらに複雑な‘反射’（吸引反射、腕と足の運動、知覚および観察力）となり‘行動’（つかむ、見る、歩く、食べる）へと発達していきます。

3ヶ月目からちょうど1歳ごろまでの間に、より複雑な感覚運動能力をもつようになり、徐々に最初の‘表現’（語彙の獲得、人の認識、情緒認知能力）へと発達します。

2歳から10歳までの間に、より高度なレベルの‘表現’が発達します。

効果的なカリキュラムにより、子どもたちの自律性の動機づけ（内的動機）を推進することと、保育者による開発を最適化することの良好なバランスが提供されるべきです。プロジェクト型カリキュラム・ピラミッドメソッドでは、遊びおよび自主性学習により、子どもたちには、すべての発達領域を探索できる豊かな環境が提供されます。子どもたちは、自ら遊び、また学ぶように自律的になることができます。

子どもたちが自ら遊びそして学ぶ場合、彼らは、最適水準ではないが、現在の能力を発揮できることが分かっています。保育者は、それぞれの子どもの発達を最適化する重要な役割を果たします。彼女は、自分のエネルギーと専門知識をグループにいるすべての子どもたちの中で配分しなければなりません。

彼女は、子どもたちに最低限の援助をして、彼らが、別々に活動し、問題を解決するのに必要な支援をしなければなりません。新しいスキルおよび情報を提供する一方、保育者は、個々の子どもたち、小グループ、およびグループ全体に注目する必要があります。すべての子どもたちに影響が及ぶので、グループ全体に働きかけることは非常に効率が良いが、子どもたちの能力や興味は多様です。それ故に、保育者は、すべての子どもたちに影響を及ぼすために、高水準の相互作用の保育テクニックを備えている必要があります。

子どもたちがチャレンジし、驚き、そして従事している時の彼女の介入は、それぞれの子どもに貢献するための心理学的空間を与える一方で、最も効果的であり、また刺激です。プロジェクト型カリキュラム Piramide Method（ピラミード・メソッド）（2005年、Van Kuyk）では、グループ調査プログラムにより、アムステルダム大学で実施された1つの研究での評価（0.80は強、0.50は中間、0.30は弱）は、言語に対し0.45、また数学に対し0.68であった。言語プログラムが積極的に改良されたフローニンゲン大学の Amsterdam Preschool 試験に係る第2試験では、言語発達に対し1.08、および数学発達に対し0.73でした。

広範な Epepe 試験では、「持続された共有思考のエピソード」が重要であることを強調されました。(Sylva、Nelhuish、Sammons Siraj-Blachford&Taggart 2005)